

私たちの無関心をふりかえるための展示

私たち実行委員会は、今年のパンフレットに複数の「女性専用バー」の広告掲載を決めました。その際《女性と自認していても、見た目・戸籍や生物学を理由に入店を拒否される場合がある》という点について、無関心（中には無知、軽視）であったことを認め、ここに報告します。

●この展示の意図

私たちがこの展示をするのは、女性であるという自認があるにもかかわらず入店を拒否され「排除された」と感じてきた人や、現在そのように感じている人がいることを知り、これからは「排除された」と誰も感じることなく、ともに生きられる社会をつくりたいからです。

また、私たちは「クィア」を名乗り、少なからず社会への影響力がある団体として、私たち実行委員会の立場（差別に加担するのではなく差別をなくしていきたい）を表明する意義があると考えます。

この展示は、私たち内部にある差別意識や、無関心に向き合うためのものであり、ご協力いただいた方々への誹謗中傷にならないように、という議論を重ねてきました。関西クィア映画祭 2014 を開催するにあたり、心温まるご支援を頂いていることに感謝いたします。

●この展示にいたるまでの経緯

(1) 広告を依頼する上で留意していた点

- ＊ 広告を載せるということは、どこかを積極的に応援し後押しすることになるということ。そのため、広告掲載を打診する前に必ず、実行委員会で確認をし、意見を出し合うこと。
- ＊ セクシュアルマイノリティの人が多く集まる場所を積極的に選ぶ。
- ＊ ゲイバーなど「男」経営者や「男」主催者による団体や店舗をあえて選ばずに打診をし、この国での「女」の経済力や立場をエンパワーしたい。

(2) 結果的に、広告の打診先として「女性専用バー」が多く集まった。

(3) あるお店の広告データに「戸籍上女性」という表記があり、『戸籍上という表記をパンフレットに掲載してしまっているのか？』という問題提起があり、実行委員会で話し合う（2014/06/14）。

(4) 議論の結果、次の3つが決まる。①以下の、実行委員会で考えた文言（太字）をパンフレットに記載したい旨を、広告を出して頂いた女性専用バーの店主へ、丁寧に話をしに行く。②可能なら「戸籍上」という表記を広告データから削除できないか依頼してみる。③この一連の経緯を本祭で展示する。

「このパンフレットに掲載されているお店は、性別を決めていない人、性別のゆらぎがある人、出生時に振り分けられた性別とは違う性を生きる人の入店も歓迎するという立場を、私たち関西クィア映画祭 2014 実行委員会と共に確認しています」

(5) 複数の店主、そのお店のお客さんと、実行委員の数名が意見交換をした。結果、上記の実行委員会で考えた文言を掲載するのは困る、という回答をもらう。ただし「戸籍上」という表記については、パンフレットに掲載予定だった広告データから削除できる、との回答をもらう。実行委員会は、「戸籍上」という表記を抜いた広告をパンフレットに掲載することに。

(6) 6月上旬に新しく実行委員会に参加したメンバーが、(1)~(5)の経緯を知り『女性専用のお店を広告に選ぶときに、なぜ入店が拒否される人がいる可能性を考えられなかったのか？ その背景には実行委員会を構成するメンバーひとりひとりに、『女性という自認があるのに入店を拒否される人』への無知・無関心・差別意識があるのではないか？』という問題提起があり、実行委員会で話し合う（2014/08/10）。

(7) (5)で「戸籍上女性」の表記を広告データから削除したお店のサイトには、まだその表記がある現状について『サイトの記載から分かるように、入店可否判定がまだ戸籍に準拠するという事象があるにもかかわらず、映画祭のパンフレットには、表記

を変えてもらったものを掲載した。そのために、実態と広告の表記にズレが生じている。これは、映画祭が体裁を見繕うために、その店に嘘をついてもらったということになるのではないかと。そして、このパンフレットを手にとった人に嘘をつくことになるのではないかと。この広告を見てそのお店に行った人が万が一、入店を断られた時、その人の体験に実行委員会は責任を持てるのか？』という問題提起が、実行委員の中からあがり、議論する（2014/08/31）。結果として、映画祭のウェブサイトや Twitter や Facebook など各 SNS に「入店をお断りされる場合がある」という旨のお知らせをする、と決まる。

●私たちの考える「女性」とは？

実行委員会では当初「男」や「ゲイ」中心にならないように「女」をエンパワーするのに、気を配っていましたが。しかし、その配慮の裏で、「出生時に振り分けられた女という性別に違和感のない人」を中心とした「女」の概念に、私たちは無関心でした。

結果として「出生時に男性という性別を振り分けられた人」が、その「女」の概念からはじき出されることがある、という点に無関心（中には無知・軽視）になっていました。

時間をかけて議論をし、ある人が「女性」であるのは、「まんこや子宮があるから」でも「戸籍が女性だから」でもなく、その人自身が「自分が女性だと思う／決めるから」という結論に至りました。私たちは、生物学的・解剖学的特徴や戸籍によって「女性」を線引きできると考えません。その人の望む性で生きられる社会をつくっていきたいと思っています。ただし「望む性なんてない」という人もいるでしょう。自分の性を決めていても、いなくても、ゆらいでいてもいい、それぞれのペース、それぞれの生き方があるでしょう。これまで「女性」だと認められなかった女性たちを女性であると認めること、そして男女の枠にハマらない、揺らいでいるなど多様な複雑な性別のあり方を認めることを両立することが肝要だと考えます。

●今回の経験をふりかえって

この展示をするために、本当にたくさんの時間を使って、実行委員会（ミーティング）で議論してきました。意見がぶつかり合い、合意形成が難しくなる局面が多々ありましたが、ようやくこのような形で、起こった事の経緯と私たちの問題認識をまとめることができました。

関西クィア映画祭 2014 のパンフレットでは、「タイヘン×ヘンタイ」というキャッチフレーズについて、以下のように説明しています。

性別や恋愛やセックスのあり方、生き方は多様だー私たちはそう思って集まります。しかし時間を重ねると、私たち自身も他者の性のあり方に無知だったり、時には受け入れられない、と気がつきます。また、性とは別の面での差別（民族、障害、社会的地位、言語、年齢、貧困など）も私たちの間にあります。

さらに、どこでも起こりがちな「少数派の中の少数派」をつくること。それに対する無関心、差別、抑圧は、私たちの間でも珍しくありません。本当に多様性と向き合い、それを手に入れるのはとても「タイヘン」なのです。（後略）

今回の経験からも、ある問題に無関心だと、その問題で人が傷ついた時や、傷つく可能性がある時に、気付けなかったり、軽視してしまったりして、適切な行動がとれず、問題を悪化させることもある、という事がよく分かりました。

また議論の過程で、私たちの多くも「出生時に振り分けられる性別」に無頓着に依拠して物事を考え、行動してきたことが分かり、その考えを改めることになりました。

●これから

今回の経験を糧に、「性別の自己決定」という課題に関心をもち続け、本人の性自認を尊重する人間関係・社会をつくっていく努力をしていきたいと思っています。その道は「タイヘン」かも知れませんが、そんな「タイヘン×ヘンタイ」な生き方に、私たち一人一人が挑戦し続けていきたいと思っています。

2014年10月17日

関西クィア映画祭 2014 実行委員会